

音楽でみんなが、ひとつになる 盲目のヴァイオリニストが 江戸川大学でコンサート



増田太郎

5歳からヴァイオリンを始める。20歳の時に視力を失うが、ヴァイオリンを弾きながら歌うという演奏スタイルで活動を始める。全国の企業、自治体、学校などで開催する「講演ライブ」では、自身の体験と演奏を融合させた音楽が観客の心に響き、「ヴァイオリンのイメージが180度変わった」など驚きと感動の声が寄せられている。2019年春には音楽を手掛けた映画「くらやみ祭の小川さん」が公開予定。増田太郎ホームページ <http://tarowave.com/> オフィシャルフェイスブック <https://www.facebook.com/taromasuda.official/>

2018年11月3日(土)E棟1階映像ホールで、江戸川大学メディア・コミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科主催「ヴァイオリンのイメージが180度変わる!?

増田太郎トーク＆コンサート」が行われた。盲目のヴァイオリニスト、増田太郎さんと約200人の観客がともに音楽の楽しさを体感した。(文・写真 増田朱音)

20歳の時に視力を失った太郎さんは、コンサートを進行の際、拍手で観客層を把握している。手の叩き方や音で性別や年齢を感じとり、「どこにどんなお客さんが座っているのかをヒタリと当てる。太郎さんに指名されたお客さんは、少し驚きながらも楽しんで話をする。目が見えない分、音や声をよく

聞いて、ときにはヴァイオリンを使ってコミュニケーションを取るのが、人とのつながりを大切にする太郎さんのスタイルだ。コンサートはシックレット・ガーデンの名曲「Raise Me Up」で始まった。2曲目に、観客が手拍子と「ハイッ」と掛け声で参加できるオリジナル楽曲「ハイファイブ!」が演奏され、会場が一つになった。敷居の高いヴァイオリンのイメージが、ガリと変わった。

7曲目の『ぼくにはきみがいる』では、ヴァイオリンを弾きながら歌うという演奏スタイルで観客を魅了した。このスタイルのきっかけは、高校時代の先輩と二人組のユニットを組んだ時に、「ヴァイオリンを弾きながら歌ってみてほしい」と言われて挑戦してみたことから。 「最初、そんなことできるの?」と思ったけれども、やってみたらすぐにできました」と謙遜する。 ほかにも、ヴァイオリンで踏切の音を再現するな

ど、太郎さんの多彩な音色で会場は盛り上がった。 「みんなと共通で楽しめるものがあるんだよ!」音楽だけでそう語ってくれるのが太郎さんの演奏の魅力だ。 今回の公演は、こどもコミュニケーション学科の宮崎孝治先生が企画した。 同学科では、経験の有無に関係なく、ピアノの曲を10曲以上ご自分の顔を見ながら弾き語りができることが必須になっている。ピアノ初心者学生にとって練習はとても苦しく、音楽が嫌になってしまう人も多い。 そんな学生に、もう一度音楽の楽しさを思い出してほしいと考えたとき、太郎さんの演奏が宮崎先生の心に浮かんだ。 盲目というハンデを負いながらも、音楽を楽しんでいる姿を、ぜひ学生にも見て聴いてもらいたいという思いは学生にも十分に伝わったようだ。同学科3年の泉知里さんは「堅苦しくない、音楽の楽しさが伝わってくるコンサートだった」と感激していた。